

原子力委員会 近藤委員長からのヒアリング後の追加メモ

検証チーム殿

先日は面談にお越しくだされ、ご苦労様でした。小生、本件に関しては国会での質問に答える際に振り返って、いつ何を考えて、どんな会合を開催し、だれと何を議論したかについては何も記憶していないことに気づきましたが、その後もあまり思い出すこともしませんでした。ご質問を受けて改めていろいろ思い出しつつお答えしましたが、その後、お話ししなかったことをひとつ思い出しましたので、書面にて語らせていただきます。

そもそもあの勉強会は、減原子力依存の原子力比率の在り方の選択肢が経産省の方で年末までにはきまるので、その後技術小委員会を再開して核燃料サイクルの選択肢を検討していただかなければならないところ、その作業のジャンプスタートを可能にするためには、予め、減原子力依存の原子力比率の在り方の選択肢の範囲を予想し、それを念頭に核燃料サイクルの選択肢を決める鍵となる要素の大局観を持って、それらに係る経済性や核燃料サイクル諸量の算定能力の在処を確認しておくことが必要と思って、データの持ち主や過去にこうした作業を管理したり、分担したりしたことのある人々を招集したものです。

で、数回の会合で、どんなシナリオを相手に作業をすることになるかの相場観を事務方と共有でき、JAEA にはそうした作業に必要な解析能力があるとの判断ができたことを記憶しています。他方、この段階では経産省の基本問題委員会の作業が遅れていたもので、いつ技術小委員会を再開できるかは不明であったように思います。ですから、会議の資料の準備作業という意識のない会合であった（事務局の冒頭招集状はそう読めると言われるかもしれませんが、小委員会との関係はそういう段階であったはずです。あの紙を資料公開ということで始めて見て、意味の通らない文面に苦笑せざるを得ませんでした。勉強会で確認した記憶はありません。）。ここまでは面談の際にお話ししたことです。

面談の際に、委員が3人以上集まっての議論する場合の考え方を決めて委員間で共有していると申し上げましたが、これを決めたのは私が任官してすぐの頃なのです。ただ、最近になってその再確認を行なったことが記憶にあるのですが、それが何故であったかがなかなか気が付かなかったのです。で、過去のメールを見ていて、それが、12月16日に毎日新聞から添付の質問状を貰った故であったことを思い出しました。

この質問状の大部分は古い話で事務局の対応のことであり、委員会の会議に関わることではないし、いまの事務局でこの当時のことを記憶しているものはいないので、特段の回答

もする必要がないとしたのですが、この最後にある質問（※検証チーム注）¹に関しては、マスコミには従来から、懇談の席で、時折、この3人ルールを説明してきたのに、どうしてなのかなと思いました。

それで、打合会の席で、委員各位に、自分は就任後すぐに、念のため、安全規制を行なう行政委員会で合議制をとっている米国 NRC のルールを調べて、彼らが内規で、委員会委員が3人以上で非公開で議論できるのは、preliminary, informal, informational, or “big picture”なトピックスに限られ、委員会の決定事項に係る議論になったら、やめることにしていることを知って、委員会としても、これまで代々この考え方を守ってきているので、皆さんにも、そのような方針を遵守してほしいこと、打合会も予備的あるいは情報共有のための会合として運営してきているので、そのように了解されたいとしたことを想起して頂きました。で、これまでやってきた委員が参加する核燃料サイクルの勉強会も「核燃料サイクルの取組の分析をするということはこういうことを扱うこと」というビッグピクチャーを共有するべく、の会合であることを確認しました。

その上で、この際、委員会定例会議の席で、このようなことを含めて、委員会の意思決定の作法について説明したらどうかと思うがとし、了承を得て、12月27日の定例会議で説明しました。その内容は議事録を見ていただければと思います。ただし、ここで委員が3人以上集まる会合についての約束事について説明しているところ、こうした会合は打合会だけのように聞こえる発言になっていますが、これは、特に議事日程の打ち合わせは毎週打ち合わせ会を開催して行なっていますと発言したつもりです。

ただ、この議事録を読み返しますと、その後の議論で、そうした大局観に係る意見交換の会合についての記録の在り方について提案があり、残す方向で意見が一致しています。ですから、それに続いて、このことを内規化するアクションを直ちにとるべきだったのですが、それをとらなかつたのは小生の怠慢とされるべきです。たしか、打合会のメモや資料をどうするかは昔から議論があり、とこかで、メモも資料も残すべしという了解に変更したことを記憶しています。それと同様、このことを取り決めるべきでありました。

で、このように整理しますと、委員が一人あるいは二人で人を呼んで行なう勉強会はどうあつかうかという課題が残りますが、これは委員個人の活動で委員会事務局として関与するものではないとしたと記憶しています。非常勤の方もおられるわけですから、彼らが誰かを集めて何かを議論することについて容喙することなかるべし（学生を呼びつけて論文

¹ 平成23年12月16日、毎日新聞社から近藤委員長に対して、「在任中、密室で原子力政策を話し合ったことはありませんか。あれば、その時期、内容、参加者を可能な限り具体的に示してください。」という質問が書面にてなされていた。

指導をしていることもあっておかしくないのですから)との認識が影響していたと思います。ただ、福島の廃炉に係る中長期の取組の勉強とか、除染技術の勉強とかを私が関係者を招集して行い、それが具体的に国の取組みの議論に発展していったことは人の知るところであり、いまから考えると会合記録があつてしかるべきと思わないでもないところです。もちろん、自分としてこれが重要というところは私見としてとりまとめてきてはいましたが、それは会合とは直接関係付けられるものではない意見具申になっています。

他方、委員長を表敬にくる内外のグループとの懇談、また、委員長が出かけて、講演し、あるいは事情説明し、意見交換したことに関しては基本的には事務局員が入り、メモを作成し、そのメモは問題のない限り各委員と共有するようにはしていますが。

小生が、打合会で、サイクル勉強会とはもはや委員5人が参加するものではないものとする。その扱いは鈴木代理におまかせする、秋庭委員が参加したいならどうぞという発言をしたのは、この頃であつたと思います。今考えますと、私は、自分で招集した会合ですから自分でこの会合の終了宣言を行なうべきでした。しかし、当時は、そうして性格を変えたとした以上、あとは、代理のやりたいようにやればいいし、もともと代理は自分の部屋で、しばしばいろいろな会合を開催しておられましたので、その一貫として適当に扱うだろうと勝手に判断しました。私自身がそのころ、策定会議本体や核セキュリティの専門部会等の原子力委員会の部会に加えて、内閣官房の低線量被ばくのリスクに関する密度の高い勉強会にも参加していて多くの時間を費やしていましたので、とにかくもう代理におまかせという心理状態にあつたことが組織的判断を疎かにしたのでしょう。したがって、その後、その勉強会がどうなっているかに付いても放念していました。これが継続していて、会議資料の準備のための会合になっていることも正確には認識していませんでした。エレベータの中で関係者から今日は勉強会とささやかかれても、これとは認識できず、ご苦労さんというのみでした。

以上を通して見ますと、委員会会務の公正な運営に責任を有するにも関わらず、代理や事務局の会議の準備段階における取組みにその観点から注意を喚起することもなく、現場任せにしていたことや、定例会議で大事な原則を議論していただいたのに、これを整理整頓して規則化することを怠ったために、付随して様々な取組に関しても公正性の確保の観点から注意を喚起する機会を逃してしまった可能性があることなど委員長の職務怠慢多々有りと反省することと頻りです。